2022年９月25日 聖霊降臨節第17主日礼拝

メッセージ「思い出に残るもの」　　牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 14章1-9節

先週は、台風が来て、急に朝晩の気温が下がり、秋らしく涼しくなった一週間でした。いよいよ明後日の9月 27 日（火）には、安倍晋三元首相の「国葬」が行われることになっていますが、世論の大多数が反対を訴え続けているにもかかわらず、その声には耳を傾けず、強行されるようです。諸外国からも国内からも参列者の多くが辞退を申し出ているとも言われる中、死者を追悼するどころか、却って笑い種（ぐさ）にしてしまっているのではないか、とすら感じてしまいます。先週 21 日には首相官邸近くで、国葬反対を訴える人が焼身自殺を図るという痛ましい事件もありました。一体何のために強行するのか、そこまでして安倍さんを神聖化して祀りたいのか、それは安倍さん自身や遺族の意志でもなく、岸田首相を始めとする一部の政治家たちの都合、単に「一旦『やる』と言ってしまった以上、後には退けない」というような面子（めんつ）や立場のためではないかとすら勘ぐってしまいます。

その一方では 19 日にはイギリスでエリザベス女王の国葬がありました。英連邦を始め、世界中から国家元首たちが参列し、厳かな雰囲気の中で執り行われた儀式は、全世界に中継配信され、多くの人々の心に残るものだったようです。エリザベス女王の国葬と、明後日に行われようとしている安倍さんの「国葬」と、どちらが人々に受け入れられ、人々の心の中に思い出として残るのか。比べるまでもないでしょう。もちろん、エリザベス女王の国葬は、王室の品位と評判を損なわないように、時間をかけて準備されて実施されたわけですから、人々の思い出に残るように、半ば政治的に利用されたとも言えるわけです。ですが、彼女が人々の心に残っているのは、やはり彼女が 70 年間の長きにわたって女王として、やって来たこと、取り組んできたこと、その姿勢の故だったのではないでしょうか。

人々の「思い出に残るもの」……。福音書の中には、イエス様と人々との出会いや交流の出来事が様々に記されていますが、それらはどのお話を取り上げても、当時の人々の思い出に残り、口から口へと語り継がれて来た数々の物語でした。

その一つが、今回のイエス様が「ベタニアで香油を注がれる」というお話です。このお話は、先ほどお読みしました「マルコによる福音書」だけではなく、4つの福音書全てに書かれているお話です。ですが、書かれ方は少しずつ異なっていて、マルコとマタイでは、名前の記されていない無名の女性が、イエス様の頭に香油を注いだとされています（マルコ 14：3、マタイ26：7）。しかし、それが「ヨハネによる福音書」では、ベタニアに住んでいたラザロとマルタとマリアの兄弟のうちの、マリアが香油をイエスの足に注ぎ、自分の髪の毛でそれを拭ったと書かれています（ヨハネ12：3）。先ほど歌った賛美歌（21－567 番）にも「マリア」と歌われていましたし、週報に載せてあるイラストも、女性が髪の毛でイエス様の足を拭っているイラストです。そして「ルカによる福音書」では、そのマリアの名前もなくなり、「罪深い女性」（ルカ 7：39）がイエス様から「罪を赦される」（ルカ7：48）というお話になっています。

以上のような細かい違いはありますが、それでもこの4つの福音書に書かれているこのお話の共通点としては、

①女性がイエス様に香油を注いだ。

②食事の場面だった。

③男性が女性を非難した。

④イエス様が女性の行為を支持し、肯定した。

という 4 点が言えるのではないかと思います。そしてマルコとマタイでは、最後に「世界中どこでも、福音が宣(の)べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」（マルコ 14：9、マタイ 26：13）とイエス様によって述べられています。このようにイエス様から「あなたのことは、世界中でいつまでも覚えられるだろう」と言われている人は、この女性の他には一人もいません。にもかかわらず、この女性の名前は記されず、覚えられることもありませんでした。それはどうしてでしょうか。恐らくそこには、時間を経るにつれ、口から口へと人づてに伝えられるにつれて、付け加えられて来た尾びれや背びれ、また差別意識や偏見に基づいた改変や編集が行われてきたのだろうと考えることができます。

ここで女性が行った「人の頭に油を注ぐ」という行為は、ヘブライ語聖書においてユダヤの王様を新しく立てる時に、預言者が行った聖別の行為です。ですから、いわば戴冠式(たいかんしき)のような王位継承を意味するような行為でもありました。私たちが

今日「救い主＝キリスト」と呼んでいる元々のギリシャ語「クリストス」も、「油注がれた者」を意味する言葉ですから、この無名の女性こそがイエス様を紛(まぎ)れもないキリストとして見抜き、指名し、聖別したというわけです。その意味で、この女性の弟子は、預言者でもありました。

その一方、このお話の前後には、頼りない、情けない男性の弟子たちの姿がいくつも記されています。イエス様の周りにたくさんいた男性の弟子たちは、口では「あなたはメシア（キリスト）です」（マルコ8：29）と言いながらも、自分たちの中で「誰がいちばん偉いかと言い合っていた」（マルコ 9：34）り、天の国、神の統治が実現した時には、「私どもの一人を先生の右に、一人を左に座らせてください」（マルコ 10：37）、と言ったりしていました。つまり、イエス様の使命、徹底的に弱くされている側の人たちと共に立ち、権力に抵抗して生きるという神様の意志を、身をもって示す。また、その故に十字架という暴力的な死を迎えようとしているということを、全く理解せず、思い違いをしていました。さらにこの後には、そのようなイエス様に失望して、イエス様を裏切り、権力者たちに金で売り渡し、またイエス様が逮捕されると逃げてしまいました。そんな弟子たちでしたが、彼らの名前はしっかりと福音書に記されているのに対して、この女性の弟子、預言者の名前は記されていません。

それは文字の読み書きのできる人が圧倒的に少数であった世界で、さらに男性優位主義の価値観がはびこる中で、このような女性の活躍が、弱められ小さくされて、記録されていったためだろうと考えられます。そのために、イエス様の頭よりも上に立ち、頭に香油を注いだはずの女性が、イエス様の足元にひざまずき、香油を足に注いで自分の髪の毛で拭うという奴隷の姿になり、さらには「罪深い女性」と描かれるまでに至りました。このようにイエス様と人々との出来事の記憶、思い出を、自分たちに都合の良いように改変して、語り継ぎ、文字に記してきた男性の福音書記者たちがいて、そしてその聖書を約 2000 年間にわたって読み伝えてきた教会がありました。

しかし、2000 年前に実際にこの地上を歩まれたイエス様の生き様は、そのような身分や性別、富や職業、宗教的なケガレなど、人と人とを区別し、分断する様々な障壁、バリアをことごとく打ち破るものでした。今回の 14 章 3 節にあるように、そもそも宗教的にケガレれていると考えられていた「規定の病を患っているシモン

の家」に行って、そこで共に食事をするということ自体が、当時のユダヤ社会では非常識、あり得ないことでした。さらにその食事の席には、男性たちだけではなく、女性たちも一緒にいて、そして一人の女性がイエス様の頭の上に立って、その頭に香油を注ぐことができました。イエス様の周りには、それほどフラットで、オープンな関係があったのだろうと想像することができます。

私たちは皆、自覚していないだけで、それぞれに色眼鏡をかけて生活しているために、自分に都合の良い言葉しか耳に入らず、自分に都合の良い出来事しか、記憶に残っていないように思います。しかし、聖書を読む時にも、日々の周りの人たちとの関わり合いの中でも、そこに何らかの色眼鏡がかかっていないか、偏見のフィルターを通していないかということに、注意していると、その向こう側にある本当の出来事、本当の思い出に出会うことができるのではないでしょうか。

この女性がイエス様に注いだ「ナルドの香油」は、インドの方から輸入された非常に高価なものだったそうで、「300 デナリオン」と書かれています。それは、およそ 300 日分の日当相当というわけですから、現代で言うと数百万円でしょうか。そんな高価なものを、何でこの女性が持っていたのか、など考え出すと様々な憶測が飛び交いますが、古代の人々が偏見と誇張を交えながら口から口へと語り継いで来ていたということを思うと、本当にナルドの香油だったかどうかや、金額はいくらだったのか、ということよりも、この女性が「自分の持っていた大切なものをイエス様に対して惜しみなく使った」ということ、その出来事が、イエス様の心に留まり、「彼女を記念して世界中で語り継がれるだろう」と言われたのだと思います。

多くの人たちと関わり合いながら、日々の命を生かされている私たちです。思わず心に留まるものとは、どのようなものでしょうか。また本当に思い出に残るものとは何でしょうか。そしてそこにはどんな色眼鏡がかかっているでしょうか。貧富の格差や、思想の違い、立場の違いなど、分断と対立がますます深まっている現代社会の中で、それらの分断と対立を取り除こうとされたイエス様の思い出、その言葉とふるまいを改めて心に留めながら、私たちは、この一週間もイエス様と共に歩んでいきます。